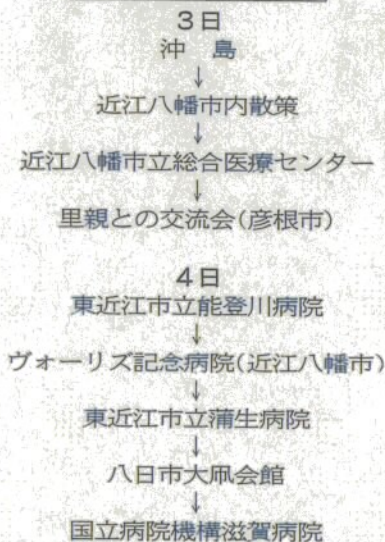


◆宿泊研修日程◆



里親学生支援プログラム 昨年度、文部科学省の補助を受け、1年生18人の登録でスタート。1年目は湖北と湖西地域の診療所などを訪問した。本年度は1、2年生48人が登録。住民や卒業生の医師ら40人が「里親」になり、滋賀の地域医療や文化について学ぶ全国でも珍しい取り組み。

◆沖島◆
初日の3日、学生たちは人が住む国内唯一の湖上の島、沖島に渡った。最盛期に800の医師5人が、交代で人を超えた島民は、現週1回往診し船に乗る在400人を切る。常ことのできないお年寄り駐の医師はおらず、近寄りらる診察している。学生たちは地元公民江八幡市蒲生郡医師会

滋賀医大「里親学生支援プログラム」研修

地域の医療や文化を知り、滋賀に愛着を持つ医師の育成を目指す滋賀医科大学の「里親学生支援プログラム」の宿泊研修が今月3、4日に、湖東地域で行われた。1、2年生34人が参加し、地元医師会が支える沖島診療所の実態や、医師不足に苦しむ中核病院を見学。「里親」の地元医師や住民とも触れ合い、2日にわたって地域医療の実態を学んだ。(岡本社)



観光ガイドの案内で沖島を散策する学生たち (近江八幡市・沖島)

地域医療の実態学ぶ



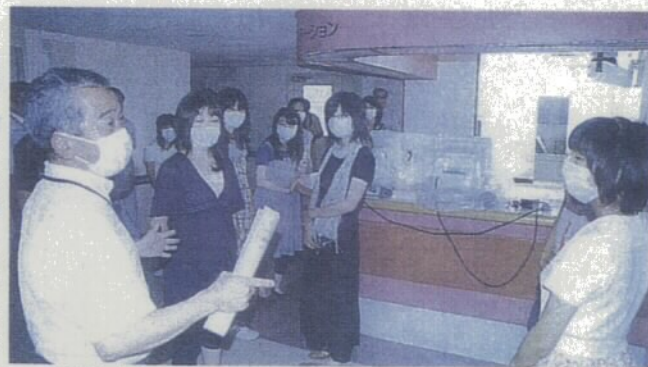
懇親会で学生に患者としての体験談を話した里親の上田さん (左) 彦根市・琵琶湖コンファレンスセンター

自分の役割考える機会
坪田准教授の話 沖島診療所のように、住民の健康を守り続ける先輩の姿や、都市部に近い地域でも医師不足に苦しむ実態を見ることができた。学生たちが、今後の自分たちの役割を考えるいいきっかけになった。

夜には、彦根市の宿は、難病と闘った経験と食事しながら、患者泊施設で里親4人とのを社会に還元したいととしての体験談を語った。里親と、普段は病院ボランティアとして初参加した上田ティアとしても活動する佳子さん、栗東市に。懇親会では学生ら

館に設けられた診療所を訪れ、対岸の近江八幡市に急病人を運ぶ消防艇も見学した。離島医療の一端を目に焼き付けた1年生中村速さん(19)は、「栗東市出身だけど、沖島自体を知らなかった。滋賀にはまだ知らないところがたくさんある」。

◆里親◆



閉鎖された薄暗い病棟。坪田准教授(左)は「医師が足りず、住民のための施設が活用されていない」と、学生たちに説明した(東近江市・国立病院機構滋賀病院)

◆閉鎖病棟◆

研修最後に、相次ぐ医師の退職で2病棟(計85床)の閉鎖を余儀なくされている東近江市の国立病院機構滋賀病院を見学した。今回の研修のクライマックスです」と、里親学生支援室長の坪田和史准教授。

閉鎖病棟の薄暗い廊下を歩き、無人のナースステーションを見る。「去年3月まで稼働していたのですが、あと3人の医師がいれば再開できます」。病院事務職員の説明に、学生は「たった3人でいいの?」でも、その3人の確保が難しいと、参加しました。

た。1年生島田加奈さん(19)は笑顔で話した。